

「 救い主、まことの王 」

イザヤ書  
マルコによる福音書

第53篇 1節～12節  
第15章 1節～15節

説 教 岡村 恒牧師

主イエス・キリストに死刑の判決が下された時、既に命は無いものと諦めていた人が、死を免れて助けられました。バラバという人殺して、最も厳しい十字架刑に処せられるはずでした。

当時、このユダヤ地域を支配していたポンテオ・ピラトが、この裁判の責任者でした。過ぎ越しの祭りのため、異邦人の官邸に入って汚れることをきらいユダヤ人たちが、ナザレのイエスを十字架につけよと外で叫び続けます。官邸の中でこの人物の取り調べを行うと、何の罪もないことが分かりました。ピラトは政治的な手腕に長け、聡明な人物だったと思われます。ユダヤ人が何の目的でこの哀れな人物を殺そうとしているのかよく分かっていました。

本来ユダヤ人は、ローマ皇帝を神として拝むことを拒絶して、まことの神だけを礼拝するので、ローマ帝国にとっては支配しにくい民族でした。もしイエスが、自分をまことの王だと言うならば反逆罪に該当しました。ユダヤ人がこの人物を王として受け入れるなら、ユダヤ人が反逆罪に問われます。しかしこれ以外の理由、ユダヤの宗教的な理由によって、この人物を死刑にすることはローマ法では許されません。

主イエスは、ピラトの尋問に対して、一番最初に「あなたが言う通りだ」とお答えになっただけで、後は沈黙の中で、えん罪裁判の中に立ち続けました。ピラトは、この人物に向かい合えば合うほど、何とかして助け出したいと思いました。無罪の人を死に追いやる重荷を負いたくはなかったのです。

この裁判で、主イエスを十字架につけて殺したのはいったい誰でしょうか？世界中のキリスト者は二千年来、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と告白し続けてきました。ピラトだけが、それほどに罪深い極悪人だったのでしょうか？官邸の中と外とを往復しながら、何とかして主イエスを救い出そうとしたのは他ならぬこのピラトでした。

ピラトは最後に水で手を洗い、この人の血には責任がないと宣言しました。ユダヤ人はその血の責任を負うと言いました。無実の人を死刑にするという事実を、この日、誰もがよく知っていたのです。

しかし聖書をよく読んでいくと、主イエスの死の責任は、ピラトや群衆、ユダヤ人指導者に

だけある訳ではないことがはっきりしています。主イエスがお生まれになった時、「すべての人」の救い主であると宣言されました。主イエスを十字架に架けて殺したのはこの私だ、と代々のキリスト者は告白し続けてきたのです。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と言うたびに、キリスト者はこの「ポンテオ・ピラト」のところに自分自身の名前を入れて、主イエスの死の責任を告白してきました。

ピラトは、祭りの慣習で一人の人を赦すことができることを思い出しました。しかし群衆が求めたのは死刑になるはずのバラバでした。ピラトは、無実のイエスと強盗殺人罪のバラバを天秤にかけながら、イエスの処刑を決断しました。死んで滅びるはずだったバラバが、一人のお方の身代わりの死によって、死から解放されたのです。あの日、主イエスが十字架にかけられた、代わりに助かった死ぬべき罪人のバラバはこの私だ、と代々のキリスト者は告白し続けてきました。「ポンテオ・ピラト」の名前を口にするたびに、私たちは自分自身の罪の深さを思い、また、バラバに救い出された自分自身の姿を重ねながら、主イエスの十字架の意味を味わい直してきました。

主イエスが、この私のために身代わりの死を引き受けて下さったと信じる者は、裁かれることがなく、死から命に移っている、と聖書は宣言します。主イエスはあの日、沈黙の中で裁かれ、死ぬべき私のために、死刑の判決と死とを受け止めて下さいました。

受難節のたびに、世界中のキリスト者がこの裁判の場面を繰り返し読んでいます。主イエスの沈黙の意味が分からないまま、死刑判決を下し、手を洗ってこの場から去っていくのか。このお方が救い主であることを信じて告白し、この私が死刑から解放されて新しい命を得たことを喜んで歩み始めるのか。聖書は、永遠の道を歩むようにと私たちを招いています。

棕櫚の聖日を迎えようとしています。やがて終わりの日、勝利者を迎える歓呼の声をもって私たちは主イエスを迎えます。そして主が用意して下さいました食卓に進み出ます。その日、今日ここにいる皆様が誰一人もれることなく、主の食卓に進み出ることができるよう祈ります。

(記 岡村 恒)